筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告　第34集　1995年３月

英語科研究プロジェクト

中高一貫教育におけるオーラル コミュニケーション能力の育成を目指した 実証的研究とカリキュラム編成（２）

（３年計画２年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
寺田　恵一・加藤　裕司・久保野雅史
鈴木　文子・谷口　幸夫・辻　　弘
八宮　孝夫

英語科研究プロジェクト

中高一貫教育におけるオーラル コミュニケーション能力の育成を目指した 実証的研究とカリキュラム編成（2）

（3年計画2年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　英語科
寺田　恵一・加藤　裕司・久保野雅史
鈴木　文子・谷口　幸夫・辻　　弘
八宮　孝夫

目次（執筆担当者）

1．はじめに（久保野雅史）…… 152
2．1993年度の実践報告
　2．1　中学2年生・46期生（寺田　恵一）…… 153
　2．2　中学2年生・46期生（加藤　裕司）…… 157
　2．3　中学3年生・45期生（辻　　弘）…… 159
　2．4　高校1年生・44期生（八宮　孝夫）…… 162
　2．5　高校2年生・43期生（鈴木　文子）…… 168
3．提案――授業の「演出」という視点（谷口　幸夫）…… 175
4．今後の展望（久保野雅史）…… 179

1　はじめに

本稿は英語科で現在取り組んでいる研究プロジェクト「中高一貫教育におけるオーラル・コミュニケーション能力の養成をめざした実証的研究とカリキュラム編成」（３年計画）の第２年次の実践をまとめたものである。

1989年３月に改訂された学習指導要領では，中学校と高等学校の外国語科の目標として「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうという態度を育てる」ことがあげられている。従って中学校では1993年度から，高校では1994年度から実施される新しいカリキュラムの中では，オーラル・コミュニケーション能力の育成を目指すことが中心的な課題となる。

本研究プロジェクト２年次の昨年も１年次と同様に本校におけるオーラル・コミュニケーション能力を育成する様々な言語活動を収集・整理し，検討を重ねて来た。その主な展開例は次の通りである。

（１）英語入門期の発音と語彙の指導――フォニックスや絵辞典の活用
（２）ＢＧＭやリズム・トレーニングを取り入れたウォーミング・アップの研究
（３）コンピュータを利用したLLの指導
（４）外国人の留学生・教師を招待して行う国際理解教育
（５）インタビュー，スピーチなどを取り入れた効果的なティーム・ティーチング
（６）英字新聞を用いたＱ＆Ａ
（７）ビデオによる授業研究

オーラル・コミュニケーション能力を育成するための取り組みとして，中学校では「聞く・話す」技能を伸長させることを主眼とした実践を紹介する。中学２・３年生はLLを利用した週に１時間の授業に関するものである。中学２年生はその他に，教科書を中心にした週３時間の授業に関しても報告する。一方，高校では「聞く・話す・読む・書く」の４技能のそれぞれの力をバランス良く伸ばすための工夫が報告されている。「読む」ことはオーラル・コミュニケーション能力を伸ばすための大切な活動とし位置付けている。「読む」という活動は筆者と読者とのコミュニケーション活動と考えられるからである。

2　1993年度の実践報告

2．1　中学２年生・46期生

中２は週に５時間英語の授業があった。筆者はその内３時間を分担して，教科書－*Sunshine English Course 2*（開隆堂）に２時間，ＡＥＴとのティームティーチングに１時間を当てた。

（１）教科書を使う授業では，教科書準拠の問題集を生徒に持たせて，定期考査に一部出題した。この学年の生徒（46期生）は中学１年の時から継続して教えている。Greetings に始まる Classroom English を１年生の始めから行っていて，英語の input を生徒にできるだけ多く与えるように努めてきた。（本校研究報告第33集参照）

中２になってテキストのレヴェルが上がったこともあり，中１の時に比較して，文法や内容の説明に日本語を用いる時間が増えてしまった。準備の段階で，授業で英語を使用する場面と日本語で説明する場面をきちんと決めておけば良かったと反省している。新出単語の説明を英語で説明する時に口頭で行ったり，黒板に書いたりしたが，生徒の理解を高めるためには時にプリントにまとめて配布しても良かったと思う。教科書の内容についての英問英答は教科書附属のテープに頼りすぎたきらいがある。もっと教師自身が英語で質問する機会を増やさなければいけないと反省している。

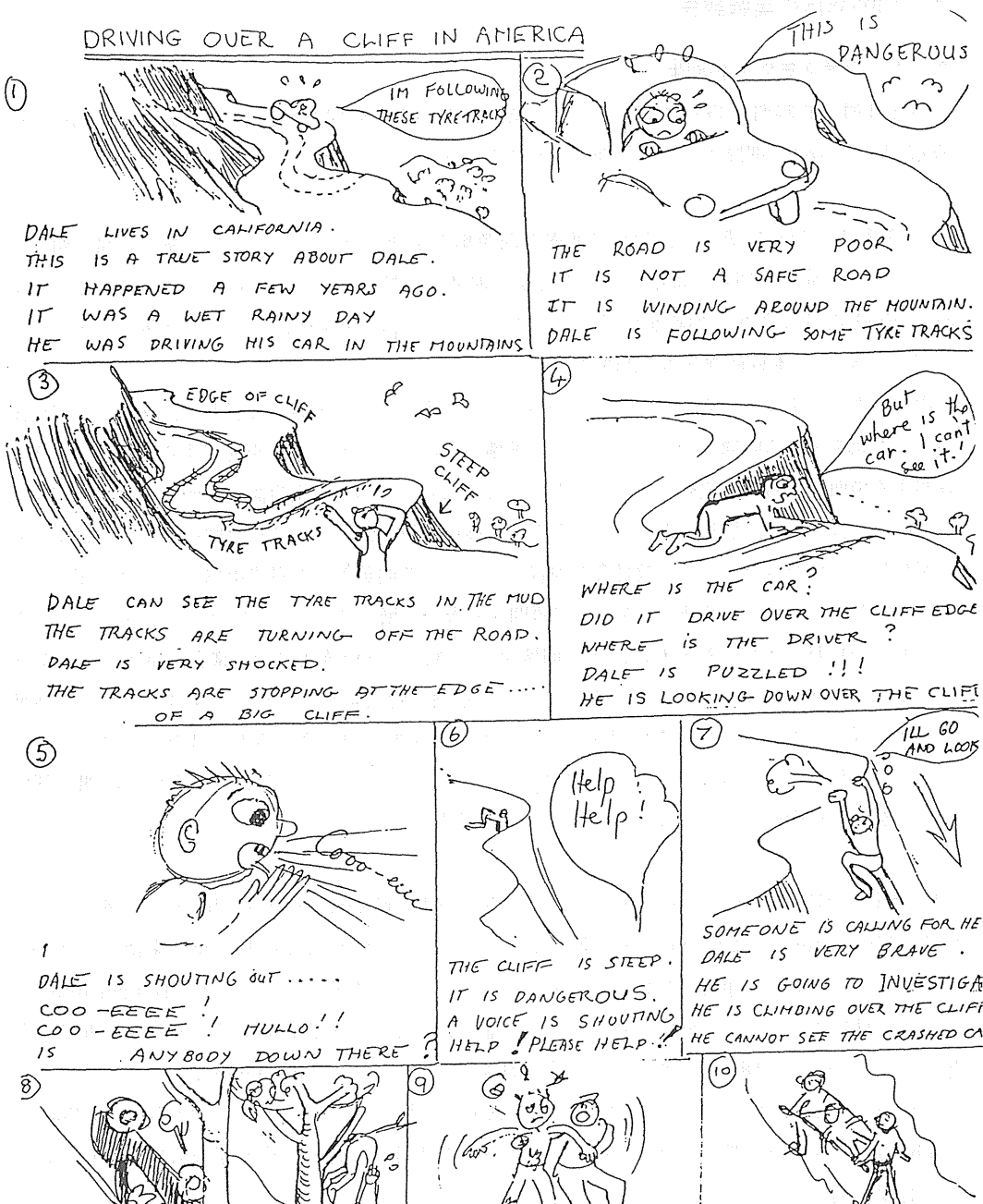
1993年の11月に本校で行われた，第17回関東甲信地区中学校英語研究協議会東京大会の第７分科会で中２の研究授業を行った。その時には，不定詞と動名詞を使ったコミュニケーション活動を生徒に行わせた。文法項目を修得する際に，単にドリル活動で終わるのではなく，コミュニケーション活動も取り入れなければ生徒のコミュニケーション能力は十分につかない。時間の制約があるが，来年度はもっとコミュニケーション活動を行いたい。

（２）本校のAETの Mrs. Petersen とは，46期生が中１の時から team-teaching を一緒に行っている。Mrs. Petersen は drawing が非常に得意で，自作の Picture Card (Picture) を使って文型を説明したり，新聞の記事を素材にした Story telling（資料１参照）をよく行う。Human Interest を主な素材にするこの Story telling は，巧みな語り口により，非常に効果的である。最近は，全体の生徒に story を聞かせた後で，数名の生徒を前に来させて，Mrs. Petersen がインタビューアーになり，story の内容について簡単な Interview を行っている。ただ，この Story telling は teacher-centered な活動になりやすいので，もう少し生徒が主体的に取り組む活動も取り入れていく必要を感じた。

生徒が主体的に参加する活動として，中学１年生の時は，“My family”というテーマで全員に１分間スピーチを行わせた。（本校研究報告第33集参照）今年度は，１学期に，Mrs. Petersen と私がモデルスキット（資料２参照）を作成してそれを生徒の前でロールプレイイングした後，生徒を３人１組のグループに分けて，簡単なスキットを作らせて発表させた。

（資料１）

DRIVING OVER A CLIFF IN AMERICA



資料２－中２の１学期に Mrs. Petersen と私が作成したモデルスキット

Pat : Hello, Keiichi. What are you doing?

Keiichi : I' m going fishing.

Pat : Where are you going?

Keiichi : Oh, I' m going to a little river up in the mountain.

Pat : Oh, I see... What are you going to take?

Keiichi : Well, I' m taking a fishing rod, a lunch box, and a small radio.

Pat : May I come with you?

Keiichi : Sure!

Pat : Thanks, Keiichi. I love fishing. I hope we catch a big fish.

Keiichi : So do I. Let' s go.

２学期の前半は，ＮＨＫのスキットコンテスト（基礎英語部門）に向けて，課題スキットの実演と自由スキットの作成と実演に team-teaching の大半の時間を費やした（資料３参照）。生徒の全グループ（42団体）の自由スキットの添削を行ったので，時間が予想以上にかかってしまい，録音に十分な時間がとれなかったことが主な反省点である。自由スキットの発表会を各クラスで行った時に，ビデオで録画したので，後日生徒のパフォーマンスを見る機会を持った。生徒にはリード・アンド・ルックアップをするように指示していたが，テキストを見ながら演技しているグループが多かった。スクリプトの内容を理解して，テキストを離れて演技する必要があると思った。Mrs. Petersen は練習の過程で，生徒達に，状況や役割に応じて感情をこめて元気よく演ずるようにアドバイスしていた。

昨年度の中１のスピーチは評価しなかったが，中２のスキットコンテストの課題スキットと自由スキットはそれぞれの発表会の時に Mrs. Petersen と一緒にＡ，Ｂ，Ｃの３段階で評価をつけた。評価の基準として，全体として accuracy よりも fluency を重んじた。具体的には，声の大きさ，はきはきと発音していること，演技力，スクリプトの内容などを考慮した。この２回の評価を基にして，観点別評価の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」という項目の評価を行った。

今年度はスキットコンテストへの初めての参加ということもあり十分な成果があげられなかった。次回参加する時は，スクリプト，演技，録音などに気を配り優秀な成績をあげたいと考えている。

資料３－自由スキットの生徒の作品例

生徒の作品を２点載せる。ただし，（　）内はこちらで訂正した言葉である。

（１）"School Festival"

Sam : Hey, Akira. Won't you play tennis with me?

Akira : Id like to, but I'm sorry I can't. I'm busy now.

Sam : Oh, It's (it's) a real disappointment. Why?

Yuji : Because our school festival is coming soon.

Sam : So you have to get ready for it?

Yuji : Right, Sam. The school festival is the greatest event in our school life. And every student works in earnest.

Sam : I see. Now, What (what) will you do in your school festival?

Akira : My class is going to present plays by Shakespeare. I'll act the part of Hamlet.

Sam : How wonderful! How about you, Yuji?

Yuji : My club will put a movie on the screen. It's an original film. Written by me! (I wrote the script!)

Sam : That's wonderful. Can I go to your school festival?

Akira and Yuji : Of course, you can!

（２）"Watching sumo"

A and B are Japanese. C is an American.

A : Do you want to watch TV?

B : Yes. What program do you want to watch?

C : I want to watch sumo.

A : Do you know sumo?

C : Yes, a little. I have read about it (in) the newspaper. Sumo is (a) Japanese national sport. Well, I know Akebono, Konishiki, and Wakanohana.

B : Oh, you know very well.

C : Thank you.

A : Who do you like best?

C : I like Akebono best, because he is very very strong.

B : I like Mainoumi best, because his techniques is (are) great.

A : Who will win this Grand Sumo Tournament?

C : Of cour (s) e, Akebono will win. He looks like a big mountain. He is " yokozuna."

2．2　中学2年生・46期生

(1) オーラル・コミュニケーション能力育成とLL機器を利用した授業

前年度に続いて，筆者は，中学1年と中学2年のLLの授業を担当したため，中1に関しては前年度と同じ内容であり，中2に関しても前年度の続きのため，ほとんどおなじだが，3学期から教材が変わったのでその部分の報告が中心になる。なお，この研究とは別に，英語科で取り組んでいる，CEC（コンピュータ教育開発センター）の実証事業の一貫としてコンピュータ・ネットワークを利用したLL授業を上記の2学年で行った。こちらの研究はあくまで効果的な授業を行うための補助手段としてのコンピュータの利用の研究なので，ここでの研究の主旨に沿わないのでふれないが，本紀要のそちらの報告を参照していただきたい。

(2) 中学2年

この学年の新しい教材以外は前年と同じなので，前年の報告を参考にしていただくとして，その新しい教材について報告する。中学2年の3学期からLongmanの*Keynote Plus*を使用し始めた。これまではLL教室の授業ではリスニングに完全に重点を置いて，多量の英語を聞かせ，様々な作業をしてきたが，かなり，力がついてきたので，この教材を使って，少し方針を変えてみることにした。この教材はリスニング能力を向上させるための訓練だけでなく，特定のシテュエーションでどのようなことを言ったらよいかを練習させたり，また，まとまった文を読んで感想を述べさせたり書かせたり，オールラウンドなコミュニケーション能力を伸ばすための教材である。まさに1994年度から始まる高校のオーラル・コミュニケーションの授業を少し先取りした形になった。この教材を実際に使ってみたらかなり高度で，中学2年生には少し難しいのであるが，ほぼ2年近くLL授業で鍛えた学年なので，進度を落として，どうにかやっている。*Listen First*よりはかなり難しい教材であると言える。

このような教材を使う場合には，評価するうえで今までとは，観点を変える必要がある。今まではリスニング能力を問う問題に限っていたが，新しい教材ではオールラウンドなコミュニケーション能力を問う問題で期末考査を行うことになった。次に示すのは，同じ生徒の3学年1学期のときの問題である。

コミュニケーション能力を評価するために英文を読んで内容を理解したかを問う問題と，聞き取った内容を理解したかどうかを問う問題の他につぎのような問題を出題してみた。

Ⅱ．(　) に適語を入れて，対話文を完成しなさい。

1．A: I'm getting ready to go sky diving over the Grand Canyon.
　　B: No　(　)! That's great.

2．A: I went to a party with some friends.

B: What did you （　）（　）（　）？

1．は相手の述べた情報に興味を示す表現の No kidding!　2．は相手の述べたことに対して感想を求める表現 What did you think of it? を書かせるのだがどちらも授業で他のバリエーションも含めて口頭練習を積んでいる。

次の問題は自分の意見を書かせる問題だが，授業時には口頭で発表させる練習をした。

Ⅳ．次の問いに英語で答えなさい。

1．What are good topics for small talk in your country?

2．What do you do for entertainment when you're alone?

1．については，授業時にどのような話題が初めてあった人と話すのに適当であるか，どのような話題が適当でないかを口頭で訓練してある。

評価の仕方も，相手に通じればよいという観点で判断して，多少の文法ミスなどは見逃して採点した。結果は約67％の正答率で非常に満足している。

このような教材を用いることができたのは中学1年のときから，リスニングの能力を LL の授業でのばしてきたからであると考えている。

2．3　中学3年生・45期生

授業内容（週毎の授業時間数）

1時間　Language Laboratory

使用教材　Lingual House　*Firsthand Access*

Firsthand Success

1時間　AET　Mrs. Patricia Petersen

Mrs. Petersen 作成の1時間毎の教材

Native Speaker によるCommunicative Approach

2時間　教科書　Kairyudo *Sunshine English Course 3*（1，2学期）

副読本　Nan'un-do *World Report*（3学期）

週4回の授業の形態はすべてコミュニケーション活動中心になるようにこころがけたが，今回の実践報告としてはLLの授業 *Firsthand Access, Firsthand Success* をどのように主題の目的に沿うように実施したかを報告したい。

i．基本的に録音されているテープはすべて聞かせた。

ii．各 Unit 最初の所にある Conversation を各人に録音させて，それに基づいて練習させた上で自らの声を各自のテープに毎週録音させた。

これは120本のテープを毎週聴取しなければならないので，容易なことではないが，こちらがかならず生徒の録音済みテープを聴取しているので，生徒は真面目に自らの声を録音していた。

生徒のテープを聴取し終わった後，かならず，各々に短いコメントを紙切れに書いて生徒にテープとともにかえした。

iii．各 unit 2ページ目の Listening の所は生徒にテープを聞かせて答えを各自のテキストに書かせ，それが終わった段階で，だれか一人のテキストを借りて，TV Projector に映して，検討しコメントをくわえた。

iv．Pair Work は男子校にはあまり馴染まないと思い，使用しなかった。

v．Reading for Meaning のページは日本の学校の生徒には適切だとおもわれる。

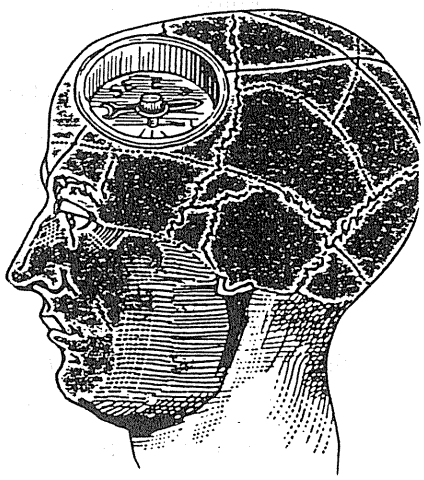
これは2回ほどテープをながして，生徒に rough meaning をつかませた後，毎回20問位の質問を作成して，それに対して，直ちに応答できるようにしむけた。

英語で聞かれたことに対して，自己の理解する正確な内容を直ちに英語で表現出きるようにしむけた。実例を別添する。（資料4）

（資料４）

The Sixth Sense

Have you ever been lost?
How did you find your way home?



Read and answer

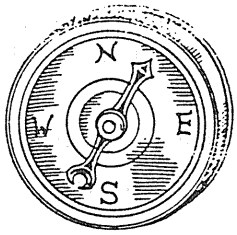
- What is the sixth sense?

_____

_____

- Why does a compass point north?

_____

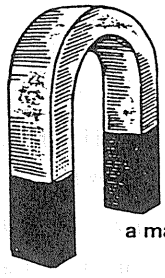


a compass

Everyone knows about the five senses: sight, hearing, touch, taste and smell. Is there a sixth sense—direction?

The North Pole, the top of the earth, is really a giant magnet. A compass points north because of the North Pole's magnetism. If you put another magnet next to a compass, the compass will point to the magnet. It won't work correctly.

The sixth sense of direction works like a compass. Some people think that we can feel the pull of the North Pole. We may not notice it, but somehow we can feel it. Some people seldom get lost and can easily get to new places because they have a good sense of direction. Maybe they have especially good compasses in their brains. Do you have a strong "sixth sense?"


a magnet

Try this!

Work with another student. Put a blindfold over one person's eyes. Turn the person around and around several times. Change your own position, too. Then have your partner stand quietly for about a minute. Ask your partner to point to the front doors of the school building. Repeat this experiment three times. Does your partner have a good sixth sense?

Now try it again. This time, put a magnet next to your partner's head. Could your partner point to the doors? If not, perhaps the magnet stopped your partner's sixth sense.

1. What are the five senses ?
2. What is the name of the giant magnet at the top of the earth ?
3. Why does a compass point north ?
4. What will a compass do, if you put another magnet next to the compass ?
5. What is the sixth sense in this text ?
6. What do some people think ?
7. Why do some people seldom get lost ?
8. Why can some people easily get to new places ?
9. Why do some people have especially good compasses in their brains ?
10. In our experiment what do you put over a person's eyes ?
11. Then what do you do to the person ?
12. How many times do you turn the person around ?
13. What do you have to change ?
14. Then what do you do ?
15. Then what do you ask your partner to do ?
16. How many times do you repeat this experiment ?
17. In your second experiment, where do you put a magnet ?
18. If your partner could not point to the doors, what happened ?
19. What did the magnet probably stop ?
20. Why does a compass point north ?

これと同じ method を教科書の授業にも副読本のそれにも常に応用した。つまり，原則として，英文を日本語に訳すことは避けてそこに書いてある英文の内容を英語で質問する事によって，生徒の内容理解を確かめるとともに発表能力を養おうとしたわけである。

評価については，上記 LL 授業の ii）で毎週記録したものを集積して使用した。

毎週の記録を通して，日本人の学生に特有な誤りと，生徒個々に特有な誤りを発見して指導することができた。考査の問題にも必ず英問英答を使い英語の発表力の養成に努めた。

また各学期に２－３名の外国人 guests を呼んだ。

2．4　高校1年生・44期生

（1）はじめに

高校1年生の英語時間数は4時間で，そのうち2時間が英語Ⅰ，1時間がティーム・ティーチング（以下，T.T.），1時間がL.L.である。私の担当はそのうちの英語ⅠとT.T.の3時間である。英語Ⅰの教科書は *The Crown English Series I* であるが，単語数や長さの制限から他の教科書の例にもれず，次のような「欠点」がある：

1）文脈不足で唐突に話題が始まることがある。

2）内容が簡略化され過ぎて本来面白い内容のものが平板になる。

3）教科書の編集時の限界から，扱う内容がやや時代遅れになる場合がある。

上記のような欠点から，その文章の書き手と読者である生徒の間のコミュニケーションは大幅に損なわれる。もちろん「読むこと」を通じての理解であるから「オーラル・コミュニケーション」とは言えないが，書き手の伝えようとする事をくみ取り，またそれに対しての自分の意見を考えながら読むことはまさに「コミュニケーション」の1つであり，それをいい加減にすることは「オーラル・コミュニケーション」にも好ましくない影響を与える。本稿では，書き手とのコミュニケーションをより深いものにするための工夫とその具体例を述べてみたい。

（2）理解を深めるための工夫とはなにか？

書き手の意図を真に理解するためには上記に挙げた教科書の欠点を補うような工夫をする必要がある。具体的にいえば：

1）扱う内容の背景知識（著者について，時代背景など）を与えて，その内容がおかれている文脈を明確にするよう努める。

2）教科書で簡略化されている部分をもう少し具体的に述べる。例えば 'various difficult problems' で片付けられているところをどんな問題があるのか具体的に挙げる。

3）扱われている内容の最新情報はどのようになっているのか調べて，随時補う。

実際に上記のような情報の与え方として，oral introduction［interaction］の中に巧みにいれて導入する方法，補充プリントで導入する方法などがある。特に oral interaction の場合には，生徒がすでに背景知識として持っていそうなことを質問しながら進めれば，内容理解の前段階として知識の活性化が行われるし，生きたオーラル・コミュニケーションの訓練にもなる。

さて，今度は上記のような情報を与えるために，どんなソース（情報源）があるか，ということが問題となる。次にそれを述べる。

（3）どんな情報源があるか？

扱う内容によって情報が求め易い場合と求めにくい場合がどうしても出てくるが，複数の手段

を挙げるので，そのときどきで組み合わせるのが有効と思われる。

1）他の教科書で同じ題材を扱っているものを探す。

この利点は，教科書であるから語彙や構文が無理のないレベルであることがまず挙げられる。また，同じ題材でも違う角度から扱っている場合もあり，平板になりがちな内容に厚みを与えてくれる。例えば，「キング牧師」や「アンネの日記」，「マザーテレサ」のような「偉人もの」は複数の教科書でみられる。昨年扱った例で言うと「ホーキング博士」の話は別の教科書にも載っていた。「砂漠化」や「森林破壊」といった「環境問題もの」もかなり共通の話題として扱われるものの1つである。クラウンには 'Grasslands in Danger' という課がある。恐竜や彗星を扱った「科学もの」もよく見られる。科学もので注意をする事は，情報が古くなっている場合があることで，これについてはあとで述べる。以上のように，採用しなかった教科書でも大いに役立つ場合があるので，時に応じてどの教科書にどんな題材が取り上げられているか browse しておくことが大切である。

2）サイド・リーダーを利用する。

教科書の場合と重複するが，「偉人伝」のようなものは各社からたくさん出版されている。教科書で出てこなかったようなエピソードが平易な言葉で書かれているので読み易い。また，たいていの場合，後ろに注釈が出ているので，多少多めな分量プリントしてもその注釈を頼りに自力で読み進めることが出来る。あるいは，further reading material として夏休みなどに1冊課題にしてもいい。「環境問題」を扱ったものも最近は目立ってきた（例えば桐原書店刊 *Only One Earth*）。oral introduction を考える場合などにも威力を発揮すると思われる。

3）英語で書かれた事典を利用する。

上に述べた他の教科書やサイドリーダーの利用は扱っている題材がうまく合致していないと不可能であるからある意味では不安定なソースであるが，百科事典の場合はほぼもれなく盛り込まれているので，安定したソースということができる。ただし語彙の制限や注釈もないので生徒のレベルにあった表現を用いている百科事典を探す必要があるし，場合によっては注釈をつける必要も生じる。本校で利用できる百科事典は以下の通りである。

a）*The New Book of Knowledge* (Grolier Inc.)

b）*Merit Student Encyclopedia* (Cromwell-Collier Educational Corp.)

c）*Young Students Encyclopedia* (Funk & Wagnell)

d）*Oxford Children's Encyclopedia* (Oxford University Press)

e）*Encyclopedia Americana*

f）*The Encyclopaedia Britannica*

a）は日本でも広く知られており，表現も平易で長さ・詳しさも適当なので1番使い勝手のいいものである（'starting with preschool children and including students in school up to the age when they are ready for an adult encyclopedia' とはしがきに書いてあることでもそれはよくわか

る)。扱う題材の概要を掴むときに非常によい。b）はa）よりもやや難，c）はa）より易であるが両方ともやや古い。d）は更に易しく情報も新しいが，分量はやや少ない。e)，f）は非常に有名な英米を代表する事典だが語彙の面でも情報の詳しさでも生徒にそのまま提供するには不適当といわざるを得ない。本当に限定して与えるか，1課が終わってかなり知識が入ってからまとめとして与えるか，どちらかであろう。

また上に挙げたような分冊本ではなく1冊本としてDorling Kindersley社の

g）*Science Encyclopedia*

h）*Children's Encyclopedia*

はカラー写真が豊富で（たいてい大きく）oral interactionなどの際にも提示し易い。また同社の*Eyewitness Guide*も同じ意味で具体的にものを見せるときに便利である（これはbird, mammalからancient Greece, mummyなど50種類以上のトピック別でそれぞれ1冊になっており，日本語版もある)。

4）洋書売り場でそれぞれの入門書などを当たる

大きな書店の洋書売り場で英語教師はlinguistics, ELTなどのコーナーに行きがちであるが他の分野のコーナーもぶらつくといろいろと勉強になる。例えば科学読み物の最新情報を得る場合は事典よりも洋書売り場に行く方が有益である。また芸術家の話（例えばピカソ）の時はアートのコーナーが便利である。

5）大使館などを利用する。

ある国や地方の地理やそこの文化などが題材となっている場合には，直接その国の大使館に行ってしまうのも1つの方法である。昨年の例ではApartheidを扱ったときに南アの簡単な説明をする本が見つからなくて仕方なく大使館に行ってみたところ，地図や歴史を書いたハンドブックをたくさん提供してもらい大いに助かった。特に南ア単独の大きな地図など滅多に手に入るものではない。さっそく黒板に貼って利用した。ただし注意することは大使館はその国の広報機関でもあるから，例えばapartheidのようにその国のマイナス・イメージになるような情報は手に入りにくい。どうしてもいい面が強調された資料になりがちだという点は念頭においた方がよい。

以上情報源として5つ見てきたが，これ以外にも視聴覚教材の利用（映画やドキュメンタリー）なども考えられる。次に実際の実践例を2，3見ることにする。

（4）実践例

1）題材の背景知識を与える——L. 5 The Wizard of Ozを例に

教科書ではドロシーがライオンを仲間に加える場面がでている。しかし，かかしやブリキ男との出会いは書いてないし，そもそもドロシーがなぜ旅を始めたのかも不明である。そこで鑑賞の視点を与えながら全体のビデオを見せることで教科書の背景知識・全体像を予め与えることにした。1つここで失敗だったのは，ビデオを見せる際に英語に集中するように字幕スーパーなしの

英語版を見せた点であった。あとでアンケートを見たところ，何となく流れはつかめたが細かいところはさっぱりわからない，途中で話が見えなくなり飽きてしまったという意見がかなりあった。やはりここは何を目的にビデオを見せるのかをきちんと押さえておくべきであった。英語の時間だから英語でみせよう，というこちらの妙な思いこみが本来の目的を押し退けてしまった。実際の授業では，ライオンとの出会いより前のかかしとの出会いの場面やその後の旅でライオンが活躍する場面を Frank Baum による原文（講談社英語文庫にあり）から取ってプリントにして読ませたりした。本来が子供向けの話であり，原文も平易で生徒も苦労なく読めた。

また背景知識ということでもう１つ記すべきことは，この課は夏休み明けに扱ったのであるが夏休みの自由課題として英語の本を１冊読んでくるという中で *The Wizard of Oz* を読んだ生徒がおり，マンチキン国の地図などを資料として添付してくれたことである。これもプリントして背景知識の１つとして与えた。ここからわかるのは，生徒自体も資料提供者になり得るし，互いに学ぶという点ではそれが理想の形かも知れないということである。

２）簡略化してある部分を補足する——L. 11 Our picture of the Universe を例に

原文はホーキング博士の *A Brief History of Time* で教科書でも原文に近い形で出ている課である。ただし教科書では Aristotle や Ptolemy の Ptolemaic Theory（いわゆる天動説）がかなりの部分を占め，そこから地動説にはどう移行したのかは全く言及されていなかった。そこで *A Genius in a Wheelchair: Stephen Hawking*（桐原書店）の該当箇所を抜粋して，また関連の日本語による科学史の本の説明も添付し Copernicus-Kepler-Galileo-Newton とつながる地動説の流れも明らかにするよう努めた（期末考査でも *A Brief History of Time* の Copernicus が出てくる部分を出題したが，結果は良好であった）。

３）最近の情報を加える——L. 7 Reptiles of Long Ago を例に

この課は Charlie Brown が恐竜のことを分かりやすく話すという形式を取っており，内容的にも子供向けの域を出ないものなのだが，それにしても現在の恐竜研究の常識から行っても余りに情報が古く不適当と思われたので，最新情報を入れることにした（例えば，この課ではブラキオサウルスは体重が重いので陸上では動きがとれず故に生活の大半は水中であったとあるが，最近の研究では湖などの水圧に耐えられるほど肺の周りの骨格が頑丈でないことがわかっている）。ところが，事典も最新とまでは行かないので，今度は洋書売り場を当たった。情報が最新であり，カラーの図版が多いという点で *The Book of Dinosaurs* は非常に優れている。これは副題に The Natural History Museum Guide とあるようにロンドンの自然史博物館の恐竜のコーナーのガイドである。子供にもわかるように書いてあるが決してレベルを落としてないという点がいい。例えば，教科書では What is a dinosaur? という項目は次のようである。

Dinosaurs were reptiles that lived a very long time ago——from about 200 million years ago to about 60 million years ago. When dinosaurs first appeared, there were not any birds or animals with fur on earth. There were many kinds of and many sizes of dinosaurs....（以下略）

Scarecrow との出会い

While Dorothy was looking earnestly into the queer, painted face of the Scarecrow, she was surprised to see one of the eyes slowly wink at her. She thought she must have been mistaken at first, for none of the scarecrows in Kansas ever wink; but presently the figure nodded its head to her in a friendly way. Then she climbed down from the fence and walked up to it, while Toto ran around the pole and barked.

"Good day," said the Scarecrow, in a rather husky voice.

"Did you speak?" asked the girl, in wonder.

"Certainly," answered the Scarecrow. "How do you do?"

"I'm pretty well, thank you," replied Dorothy, politely. "How do you do?"

"I'm not feeling well," said the Scarecrow with a smile, "for it is very tedious being perched up here night and day to scare away crows."

"Can't you get down?" asked Dorothy.

"No, for this pole is stuck up my back. If you will please take away the pole I shall be greatly obliged to you."

Dorothy reached up both arms and lifted the figure off the pole, for, being stuffed with straw, it was quite light.

"Thank you very much," said the Scarecrow, when he had been set down on the ground. "I feel like a new man."

Dorothy was puzzled at this, for it sounded queer to hear a stuffed man speak, and to see him bow and walk along beside her.

"Who are you?" asked the Scarecrow when he had stretched himself and yawned. "And where are you going?"

"My name is Dorothy," said the girl, "and I am going to the Emerald City, to ask the Great Oz to send me back to Kansas."

"Where is the Emerald City?" he inquired. "And who is Oz?"

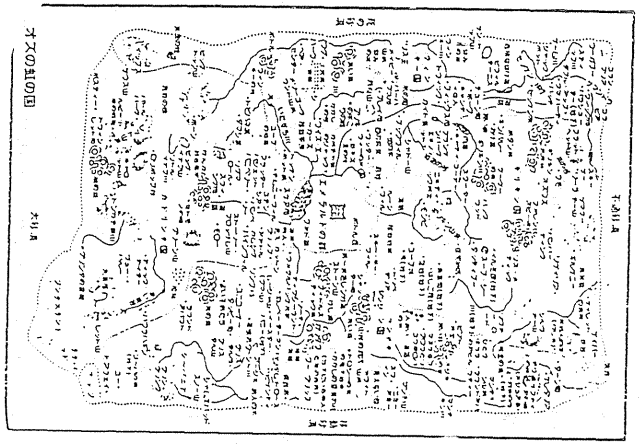
"Why, don't you know?" she returned, in surprise.

"No, indeed; I don't know anything. You see, I am stuffed, so I have no [redacted] at all," he answered sadly.

"Oh," said Dorothy, "I'm awfully sorry for you."

"Do you think," he asked, "if I go to the Emerald City with you, that Oz would give me some [redacted]?"

たばねる たばねること
Perched up ねぐらにすわる



オズの国の国

資料5　The Wizard of Oz のプリント（かかしとの出会い・マンチキン国の地図）

資料6　11課の地動説の補足

人・11ー補足③ オモテ ウフロク

天動説から地動説へ

◆コペルニクスの宇宙◆

プトレマイオスの天動説は、静止した地球が宇宙の中心にあり、その周りを太陽、月、惑星および恒星天が回っているというものであった。プトレマイオスは、アリストテレスの自然学を採用しており、同じくアリストテレスの哲学を支持していたカトリック教会は、この説を真理として認めたため、天動説は16世紀になってもヨーロッパ世界を支配していた。しかし中世後期からルネッサンスにかけては、誤差が生じてきて役に立たなくなったユリウス暦*の改変の問題や、新大陸やアフリカなど遠方への航海の必要性から、正確な航海暦をもとめる声が高まり、それと共に天文学の復興が起こった。

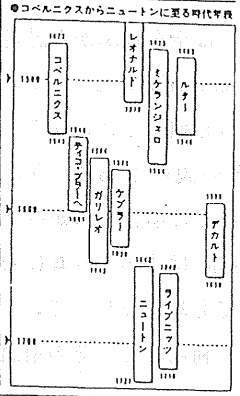
こうした状況下で、最初に天動説に異論を唱えたのがポーランド生まれの天文学者コペルニクス（1473−1543）だった。彼はイタリア留学中、医学を勉強するかたわら、アリストテレスを始めとする数多くの古代ギリシャの宇宙論に接したり、多くの観測資料を研究するうちに、天動説よりも、地球が太陽の周りを回っているとする地動説の方が、天体運動を単純かつ合理的に説明できることを確信し、後年、自らの考えを『天球の回転について』（全6巻）という大著にまとめ上げた。

彼はこの著作の中で、当時知られていた土星までの惑星を現在知られる配列と同じように並べた上で、天動説の周転円の考え方では複雑になりすぎて説明が困難となっていた水星や金星の運動や、外惑星の逆行現象などを統一的に明確に説明してみせた。もし地球が太陽の周りを回っているならば、年周視差が生ずるはずだとする当時の批判に対しては、宇宙は想像できないほどに広大であり、恒星天の距離も非常に遠くにあるために、年周視差は問題とはならないと反論している。

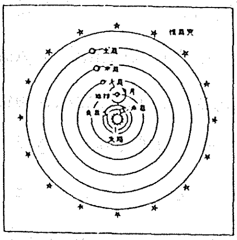
コペルニクスは、早くから地球が宇宙の中心ではないことを確信していたが、当時の社会状況から、著書の刊行を最晩年になるまで差しひかえていた。同書が実際に発刊された時、コペルニクスはすでに臨終の床にあったという。●

▲ニコライ・コペルニクス（1473〜1543）

●コペルニクスからニュートンに至る時代年表

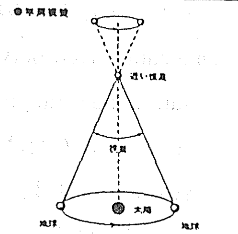


＊ユリウス暦



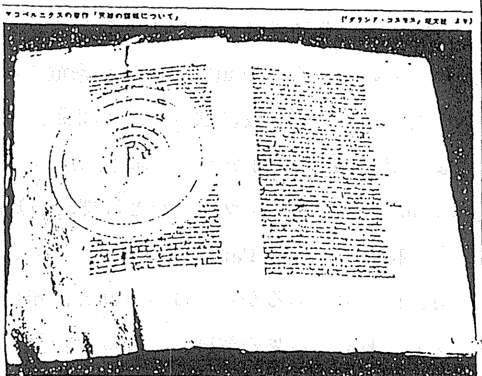
▲コペルニクスの宇宙　彼の地動説は天動説における太陽と地球の位置を置き換えたが、月だけはもとのように地球を中心とした軌道上を回転させた点で、回転中心を1つとしたギリシャ以来の同心天球宇宙と異なっていた。しかし「等速円運動」である点は、そのままであった。

●年周視差



地球が公転するにつれて、恒星は天球上で周期的に位置をかえていき、半年をへだてた軌道上で、ずれの角度は最も大きくなる。このずれを年周視差という。年周視差は[illegible]秒以下と小さくコペルニクスの時代では観測できなかったため、地動説を否定する有力な証拠とされた。

▼コペルニクスの著作「天球の回転について」　（『グランド・コスモス』旺文社 より）



宇宙観の歴史 ──●

> **●天動説と地動説**
> 大昔の人たちは、地球は宇宙の中心にあり、その周りを月、太陽、ほかの惑星などが回っていると考えていた。この考え方を天動説と呼ぶ。地球中心説とも言われ、キリスト教の教会の支持もあって、長い間、人々に信じられてきた。これに対し、地球も惑星の一つにすぎず、太陽の周りを回っているという考え方を地動説、または太陽中心説と呼ぶ。16世紀から17世紀にかけ、コペルニクスやガリレオが宇宙の観測をもとに主張した。

The Ptolemaic theory was completely overthrown in the 16th century. At this time Japan was in the period of the civil wars. It was in 1543 that a Portuguese ship ran ashore in Tanegashima and guns first came to Japan. In the same year, in Europe, a Polish astronomer called Nicholas Copernicus published a book called, '*On the Revolutions of the Heavenly Spheres*'. In this book he said, "The sun is sitting in one place and the earth is going round the sun." This was a brave thing to say. Because he said that it is the earth which moves, this theory is called the 'Copernican theory'. It astonishes me that people in that age, without rockets or telescopes, were still able to discover the truth. However, it was not

'Ptolemaic Theory'「'天動説'」 Just as the moon does「月がそうであるように」 As a matter of fact「実際に」 was completely overthrown「完全に覆された」 in the period of the civil wars「戦国時代の」 ran ashore「漂着した」 astronomer「天文学者」

'On the Revolutions of the Heavenly Spheres'「'天体の回転について'」 going round「回転している」 'Copernican Theory'「'地動説'」 It astonishes me that～「～には私も驚いている」

easy for people to accept this theory because it goes against our common sense and was too revolutionary. The Catholic church still believed in the Ptolemaic theory, and many people were afraid of speaking against the church. Copernicus presented his ideas without giving his name. After the death of Copernicus, some scholars who spoke in favour of his theory were sentenced to be burnt to death. At this time, speaking your beliefs meant gambling with your life.

The Copernican theory was slowly accepted by scientists, and some evidence to support the theory appeared in the 17th century. At this time Ieyasu Tokugawa ruled Japan and the Edo era was just beginning. Galileo Galilei, an Italian scientist, and Johannes Kepler, a scientist from Germany, were the first to prove the Copernican theory.

Galileo started studying the sky through telescopes, which had recently been invented. He said publicly that the Copernican theory was true. The Church showed its anger towards Galileo. He was taken to a religious trial and ordered not to publish any books about Copernican theory. Even today we remember his words at the trial, "It still moves."

goes against our common sense「常識に反する」 revolutionary「革命的」 were afraid of speaking against～「～に背くのを恐れた」 in favor of～「～に賛成して」 were sentenced to be burnt to death「火あぶりの刑に処された」 gambling with your life「命がけ」 ruled「支配していた」 a religious trial「宗教裁判」

余りにも漠然とした書き方ではないだろうか。reptiles とだけ言われても定義としては不十分であるし，many kinds of ... many sizes of ... に到っては実質的な情報はゼロに等しい。

これが，上述の本の場合は次のようである。

Dinosaurs lived between 230-65 million years ago. Dinosaurs lived on land but could not fly. Dinosaurs had straight legs tucked underneath their bodies. Dinosaurs were reptiles.

単文をつなげただけのそっけない感じさえする文章であるが，ここには恐竜の特徴が端的に述べられている。まず恐竜は飛べないこと，またまっすぐに伸びた足のあること。原文では上の文章に続いて，Which of these animals was a dinosaur? という1文があり，10頭の動物の絵が出ている。今の定義を当てはめると自動的に dinosaurs, non-dinosaurs に分けられるようになっている（例えば，普通恐竜と思われがちなプテラノドンは空を飛ぶから恐竜ではないし，ワニは足が曲がっているからは虫類ではあるが恐竜ではないことがわかる）。ここなどは，挙げてある動物を拡大コピーして黒板に貼って，英問英答しながら分類するということもできる。

また2億3千年前がどんな時代だったかなどの説明もある。Triassic period（三畳紀），Jurassic Period（ジュラ紀）などは理科の知識として日本語では知っているから出してもいいだろう。特に Jurassic Park の映画のヒットで Jurassic はすっかり耳になじんだ言葉となった。今は情報化社会であるから，はっきりとは知らなくても耳になじんでいるという言葉はたくさんあるはずである。言葉の教師としてはその点をうまく利用して，その用語の元の意味だとか由来だとかに折りに触れて言及したいものである。

以上3例を見てきた。これらの授業が，他の授業に比べて生徒の興味をより引いたかどうかを示すアンケートのようなものは残念ながらないし，男子ばかりで理科系が好きなものが多いということはあるかもしれないが，恐竜やホーキングの宇宙理論の課がこちらとしてはいちばん手ごたえがあったように感じた。

（5）おわりに

本稿では生徒が書き手とのコミュニケーションを図る際にそれの手助けとなるような工夫を見てきた。大きく言えば「スキーマ（schema）の活性化」と言えるかと思う。どちらかと言うとプリントの形で与えることが多く oral interaction による導入は少なかったが，オーラル・コミュニケーションの育成ということを念頭に口頭による導入も増やして行きたい。

2．5　高校2年生・43期生

英語Ⅱの授業週4時間中，3時間は教科書を中心とした授業で，他の1時間はAETとのティーム・ティーチングの授業となっている。4時間中にただ1時間ではあるが，AETとのティーム・ティーチングで教科書の内容をコミュニカティブに展開する授業の工夫によって，生徒に学習への動機づけや興味を与えることができた。また2年間の英語Ⅰ，Ⅱを通して次のような点を考慮に入れて授業を行った。

1）問題意識を持たせるような読みの指導

教科書の内容に興味を持たせるためにも，ただ通りいっぺんの読み方ではなく，生徒が問題意識を高めるような，教材の研究と指導法を行った。

2）AETの特性を生かした授業の工夫

AETとのティーム・ティーチングの授業を教科書との関連性を考慮にいれ有効的に行った。

以上の英語Ⅰ，Ⅱでの考慮点を中心に，実際の授業で「読むこと」，「書くこと」をどのように展開したか，以下その活動内容やポイントなどを主に紹介したい。

（1）問題意識を持たせるような読みの指導

ここでは「読むことの指導」をいかにするかという重要な点が含まれてる。教科書の内容に生徒がどうアプローチしていくのか，またそうさせるのかは指導者の力量にかかっている。

教科書の内容を距離を置いて眺めるのではなく，その中に実際に生徒が入り込んでいかれるような授業の展開，教材の提示が成功へのカギとなる。このようにすることではじめて，教科書内容が生きたものになってくる。

実際に興味の持てる内容をどのように提示するか，つまり効果的な動機つけはどうしたらよいかということを教科書利用した具体例から紹介したい。

1）Lesson 8　HE, SHE, OR HE OR SHE?——SOME USAGE PROBLEMS IN ENGLISH

David Chrystal（本課の著書）の同僚である *Longman Language Activator* の編集長 Della Summers 女史に，英語における SEXISM の問題を語ってもらうとともに，David Chrystal 氏についての研究また氏にまつわるエピソードなどにも触れてもらった。Della Summers 女史は辞書の編者でもあるので，辞書作成上のさまざまな苦労話などが紹介され，生徒の辞書に対する興味を喚起したようであった。これらネイティブからの直接の説明は，生徒がこの課の内容を理解する上で大いに役だったようである。

2）Lesson 9　ARTISTIC CREATION IN PAINTING

本校の外国人講師 Mrs. Petersen は芸術科を専攻して，絵画を得意としていられるので，本文で比較対照されているデッサンについての説明をしてもらい，また実際にデッサン方法などを教授していただいた。通常のレッスンでは触れないような絵画に関する特有の表現なども聞く機会が持て，課の内容にあるデューラーの細密画の特徴も容易に把握できたようだ。

3）Lesson12　Our New Knowledge of Learning

Peter Drucker 氏の実際の講演の一部を聞かせたことで，本の中だけで存在するただ有名な著者というより，現実に存在する研究者として実感できたようだ。また彼の業績や，研究内容の一部を知ることで一層生徒の知的好奇心を満足させたといえよう。

以上は教科書を利用した２－３の例であるが，教科書の課への関連性を持たせるような材料，機会を提示することで，生徒もレッスンを新鮮なものとしてとらえることができたと言えよう。次に実際の「読みの指導」における目標とその活動内容を紹介する。

〈目標〉

①パラグラフ・リーディングに慣れさせる

②リーディング・スキルを伸ばす

〈活動内容〉

より速く，より正確に内容をつかむには，語や文単位で意味をとらえるのでなく，パラグラフ単位で意味をとらえることが必要になってくる。パラグラフ・リーディングの手法を取り入れ，実践的な読解力を養うことを目指した。

なおパラグラフ・リーディングにおいては，主題のとりかた，読みとりの過程はどのようにするか，いかにして速く内容をとらえるかなどに注意しながら，skim reading，scan reading などのリーディング・スキルを適当に取り入れ，内容全体を読み通していくようにさせた。

教科書を教材として使用した場合の活動は次のような要領で行った。まず課の最初の２，３パラグラフは生徒と interaction の形をとりながらパラグラフのまとめを板書していく。その以降は生徒が中心になって，パラグラフ毎のまとめをし，最後に課全体の要旨をまとめる。それらを最終的に発表させることでパラグラフ読みのチェックを完成させる。

（２）AETの特性を生かした授業の工夫

AETとのティーム・ティーチングの授業で特性を発揮できる最も有効的な授業の１つには，「書くことの指導」があげられるのではないだろうか。ここでは生徒の表現力を伸ばすにはどのようにしたらよいか，「書くことの指導」における目標とその授業展開の１例を紹介したい。

〈目標〉

①文法的に正しく，また自然な英語の表現を習得する。

②発想法の違いを AET を通して学ぶ

〈使用した教材とその活動内容〉

１　和文英訳と表現力

EFFECTIVE ENGLISH WRITING という和文英訳練習を中心とした補助教材を利用し，生徒が和文英訳した文をAETに授業の時，生徒の前で実際に訂正してもらった。生徒が実際に書い

た文には，文法的には正しい英文でも，表現法がぎこちなくなっており，自然の英語とはほど遠いために，理解しにくい文が目についた。また発想法の違いからくる文の不自然さも多くあった。ある構文の練習として英作文が与えられているのだが，ネイティブ・スピーカーは不自然だという理由で必ずしもその構文を使いたがらないことがしばしばあった。英語の話し手が書いた英文の中で頻繁に活用されている文をなるべく多く参考文として取り上げることによって，不自然な文を避け，表現力を伸ばす手助けとした。自分の思っていることを正しく伝えるためには，英語の文法や発想法にあった表現を用いる必要があるということを生徒に認識させるよい機会になった。

2　パラグラフ・ライティングにつながる練習（資料７）

教科書の各課でパラグラフ・リーディングを行ったあとで，内容全体が把握できたか否かまとめのライティングをさせた。最初は本文をすこし変えるだけの書きに終わってしまうことがあったが，回を重ねる毎に要領を得てきた。期末試験では，Lesson 6 の MAN IN HIS GARDEN の一部分をパラグラフ・ライティングさせる問題を出題し，「書くこと」の評価の一部とした。

3　教科書の内容の SUMMARY（資料８－９）

教科書の大半の課は AET とのティーム・ティーチングの授業にも組み込まれていたので，各課の内容の summary を AET 自身の言葉で書き直してもらい，それを生徒に披露してもらう機会は多く持てた。これが動機づけとなり，生徒は表現力を伸ばし，また自然の英語でまとまった文を書くということの重要性を認識したようであった。

4　語彙の強化

AET が教材として提示してくれた handout の中には，教科書で使われていない語彙や表現が数多く見られた。それらの語句は日常頻繁に使われるような，有用性のあるものが多かったので生徒には積極的にそれらの語彙の使用を心がけるようにアドバイスした。尚授業では，各課で出てくる単語や語句と実際のネーティブが使う語句との差異や使い分けなどを説明してもらうことで，語彙強化にもつながったようである。各課のコンプリヘンション・チェックのプリントと共に，Vocabulary sheet for (A FAREWELL TO ARM) と称する単語リストの handout は生徒には好評であった。

（３）結論

高学年になるにつれて受験も意識してくるので，生徒の現状も考慮にいれた授業を展開するよう心がけた。その意味でもパラグラフ・リーディングや表現力を伸ばすライティングの指導は適切なものだったと思われる。外国人とのティーム・ティーチングの授業の中では，発想法の違い，また文化的な相違からくる様々な問題を考えさせることで，ただ漠然と読む，書くのではなく，筆者の考えを自分と対照させながら読む，あるいは相手に理解されるよう自分の考えを明確に表現するといった積極的な姿勢を身につけようとする動機づけを与えられたのではないだろうか。

（資料７）

8 [E] 記号順４つ （ 工 ウ オ キ ）

[F]

① Life in mountains is quite different from life on the beach.

② I met her for the first time in the last twenty years.

2 3 I think it amazing to speak with people from other countries.

④ No matter how fast we walk, we won't be able to get there in thirty minutes.

19

[G]

〈Gardening is a serious affair in Japan and Japanese consult with a gardener before constructing a garden. But Englishman usually knows what he wants in his garden.〉 〈has a clear ~~paraphrase~~ idea〉 6

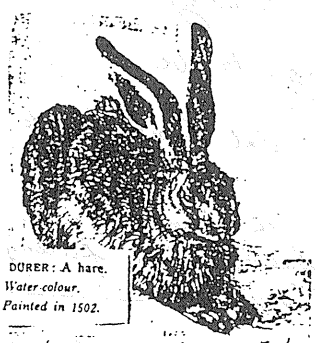
〈In Japan the hand of man should be hidden in a garden. But it is perfectly proper that the hand of man be visible in a garden in Britain.〉 6

〈The Japanese seem to show more respect for garden than the British, and the British go to a garden just for fun. But the average home garden seems to play much more important role in Britain than in Japan (94)〉 6

（資料８）

Lesson 9 Artistic Creation in Painting

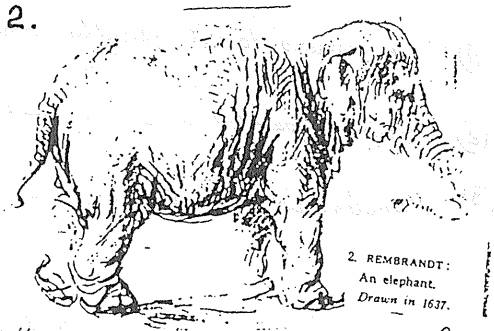
1.



1. DÜRER: A hare. *Water-colour. Painted in 1502.*

Newcomers to art usually want paintings to look "true to life" or a copy of nature. This painting of a hare is an excellent representation or copy of the animal! It looks life like.

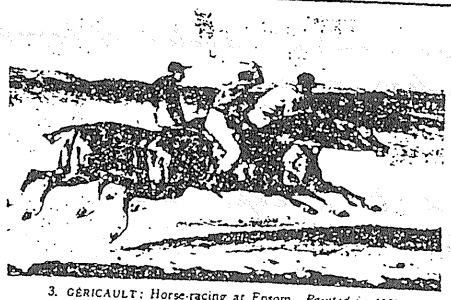
2.



2. REMBRANDT: An elephant. *Drawn in 1637.*

However artists also have the freedom of expression to express a certain emotion through their art. This drawing by Rembrandt shows fewer details but it gives us the feeling of the elephant's wrinkly skin with a few chalk lines.

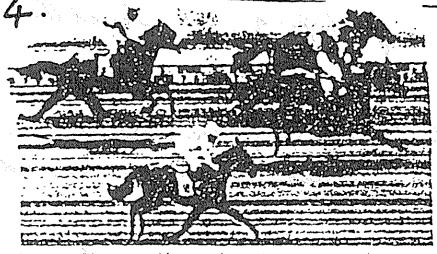
3.



3. GÉRICAULT: Horse-racing at Epsom. *Painted in 1820.*

We usually think that pictures should look like nature. We have enjoyed paintings of horses. However, for many years no body noticed what a horse really looks like when it is running. Pictures like this one usually showed all four legs leaping through the air and stretched out.

4.



4. *The same subject, as the modern camera sees it.*

However when a camera was produced that could take 'speed' photos, we observed that both painters and their public had been wrong. No galloping horse ever 'moved' the way in which artists had painted.

5 In the past we were all inclined to accept conventional forms or color as the only correct ones. Children think that stars must be star shaped ☆. Many people think that a sky must be blue.

If we try to forget all were heard about green grass and blue skies and look at the world like beings from another planet on a voyage of discovery, and have seen it for the first time, we may find that things are apt to have the most surprising colors ..... It is not easy to get rid of these accepted ideas, but the artists who succeed best in doing so, often produce the most exciting works. We can then learn to see nature with new beauties of whose existence we have never dre

（資料９）

Fill the Gap : Artistic Creation in painting.

① Newcomers to art usually want paintings to be _____

② Dürer painted a _____ in 1502 that looked "true to life".

③ Rembrandt painted an _____ with fewer details but it gave a feeling of the elephants _____ skin

④ For years people thought that horses galloped with their legs stretched out and _____ through the air

⑤ However when a _____ produced a photo of horses galloping, it showed that their legs moved _____ _____ _____

⑥ In the past we were all inclined to accept that conventional forms and color are the _____

⑦ We should try to forget about _____ grass and _____ sky

⑧ We should try to see our world as if we are beings from _____

⑨ The artists who succeed best are the ones who are able to get rid of _____

DRAW EXAMPLE

⑩

This is how artists draw galloping horses

DRAW EXAMPLE

⑪

This is how a camera records true action of galloping horses

3　提案――授業の「演出」という視点

（1）はじめに

映画やドラマなどでは，演出がとても重要である。演出がうまくなされていなければ，良い作品に仕上げることは不可能である。授業でも「演出」が重要である。たとえば，ある学習活動を行うためにはどのような演出をするか，ということである。また，その活動を促進させるためにはどのような演出が効果的か，ということも考えなくてはいけない。

本稿では，オーラル・コミュニケーション能力の育成との関連で，どのような「演出」が可能であるかということを，これまでの実践から述べてみたい。

（2）授業の演出

演出１――ウォームアップ

体育や音楽の授業では，準備体操や発声練習などの「ウォームアップ」は不可欠である。英語の授業でも，「声出し」のためにはウォームアップを行ったほうがよい。特に，中学の授業では不可欠と言っても良いだろう。その際，「演出」が必要となってくる。

1994年１月から３月まで，中学２年生（46期）を担当した。授業のはじめに，音楽やリズム音を効果的に活用した音声教材 *Rhythmic Warm-up*（非売品）を使用した。この教材は，基本的にはボキャブラリー・ビルディングをねらっているものである。内容は「果物」「楽器」などのように，単語を概念別に10個ほど選択されており，軽快な音楽やリズム音とともに，曲が流れるようになっている。それぞれの単語のあとに，ちょうどリピート分の箇所が含まれているので，生徒たちは自然と声出しが図れるようになっている。過去数年間にわたって LL 教室で使用しているビデオ機材 *F.I.A. Rhythm Training*（地球人村）の音声テープ版と考えればよい。

ただ単に教師が単語を読み，生徒がリピートするだけの活動と異なり，自発的に生徒がモデルについて発音してみたくなるという「演出」が大切なのである。そのためには，アップテンポな音楽やリズム音が効果をあげるというわけである。極言すると，生徒たちは歌に親しんでいるかの感覚で，単語をリピートしているかのようである。

もう一つ言えることは，オーラル・コミュニケーション能力を育成する上で，日頃から単語力をつけさせておくということが大切なのである。たとえば，スポーツの話題を自己表現する際にも，当然，スポーツ関連の用語を知っておくことは必須であろう。しかし，ボキャビルは時間がかかるものであり，日頃から意図的に単語の増強を図っておかなくてはいけない。

また，このウォームアップをしっかり行うことで，授業中の音読や発表などの声出しにつながるということも言える。さらにウォームアップという活動で，授業開始直後の雑然となっている雰囲気を落ちつかせ，学習に集中させる効果も副次的に出てくるのである。これも一種の「演出」と言えよう。

演出２――効果音の活用

中学・高校に問わず，教科書付属の音声テープを聞いてみると，「演出」が効果的になされていないように思える。ひらたく言うと，聞いていてあまり面白味がないのである。具体的に言うと，レストランなどでの会話でも，ネイティブ・スピーカー同士の声しか聞こえず，臨場感がまったく入っていない。いわゆる「効果音」がないのである。

これでは，短い英文を繰り返し聞かせる必要がある中学の授業で，役に立たない。つまり，同じものを何回も聞かせても飽きさせない「演出」が欠けているのである。ということは，モデルとして学習者がマネしようという気を起こさせないということもありうる。そこで，対話文の練習に「効果音」の入ったテープが重宝する。

たとえば，次のような対話を扱うとする。

〈ヘッドフォン・ステレオ〉

Mai : Hey, Brian. Brian! Brian!

Brian : What? Hi, Mai. How are you?

Mai : Can you hear me?

Brian : What?

Mai : Come on, Brian. Turn off that music. （＊）

Brian : Why are you so angry, Mai?

Mai : It's too loud. It's music to you, but it's just noise to me.

ＮＨＫラジオ『基礎英語２』４月号（日本放送出版協会）

この会話を，ウォークマンのノイズを録音したものを流しながらロール・プレイさせて，（＊）印で，ノイズを止める。その単純なことが，対話練習を生き生きとしたものにさせるのである。これが「演出」の強みなのである。

次のステップとして，「プラスワン・ダイアローグ」の手法を用いる。この対話文に自分の言いたいことを一言つけ加えて演じさせることで，コミュニケーションにつながるのである。

演出３――ＢＧＭの活用

ラジオのＦＭ放送などを聞いていると，会話やトークのバックにＢＧＭをつけることで，かなり聞きやすくしていることに気づくことがある。たとえば，ともすると単調になりそうな「天気予報」にＢＧＭをつけることで，かなり聞き手を引きつけることができる。一方，教科書に付属している音声テープに含まれている「天気予報」では，背景に何の音も入っていなくて，まさに単調である。教科書会社をはじめ教材製作にかかわる関係者は，生徒に提示する音声に関して，

もっと注意を払ってもいいのではないだろうか。

また，テレビのドラマなどでは，シリアス，コミカル，サスペンスなどのＢＧＭで状況を副次的に説明しようとしている。これらはすべて「演出」なのである。

ここでは，知人と共同で制作した音声教材 *Rhythmic Wind*（英語教育懇話会）で展開した演出を，１つの方向性ということで紹介したい。たとえば，次のような英文がある。

Once upon a time, there lived an old man and an old woman. One day the man went up to the mountain. And his wife went down to the river.

これをそのまま読んでも，あまりおもしろくない。そこで演出として，さまざまなＢＧＭをつけることで，同じ英文を何度聞いても飽きないようになる。具体的に，以下のＢＧＭに合わせて，ネイティブスピーカーに吹き込んでもらった。

（１）日本昔話風ＢＧＭ

（２）ニュース風ＢＧＭ

（３）コミカル風ＢＧＭ

（４）ラップ風ＢＧＭ

加えて，それぞれにカラオケを用意することで，モデルの提示→口頭練習→発表という展開も可能となるわけである。

この練習は，同じ英文をいろいろな心理状態で口頭発表するということに役立つのである。英語を実際に使用してコミュニケーションを図ろうとするときに，日本人学習者は棒読み風で，気持ちがこもっていないとよく批判される。これを打破しようとする試みである。

演出４――小道具としてのビデオカメラ

生徒に対話文を演じさせたり，説明文を読ませたりするときに，ビデオカメラが小道具として非常に役立つのである。これは，当プロジェクト研究の昨年度の報告（1994）で，久保野が報告している「実技テスト」に通じるものである。

ビデオカメラで録画する，またはビデオカメラを目の前に置いておくだけで，演出効果が高くなる。つまり，スキットなどを録画するということで，学習の過程をいわゆる「作品づくり」としてとらえることになり，参加意欲が高まるのである。また，前述のニュース風ＢＧＭとの併用で，説明文をニュースキャスターになりきって発表することが可能となる。

これに関しては，松下視聴覚教育財団から助成金を受けて，英語科有志が行った研究に詳しい。平成５年度「視聴覚教育研究助成レポート」（松下視聴覚教育財団）を参照されたい。

（３）評価の問題点

今までは，授業を実践する上での「演出」の重要性を説いてきたが，授業と表裏一体の関係にある「評価」についても軽く言及しておきたい。

オーラル・コミュニケーション能力を評価するというのは，少なくともペーパーテストだけで行う性格のものではない。かといって，リスニングテストさえ行っていれば良い，という単純なものではない。そこに，コミュニケーションの要素を測れる課題を含まない限り，適正な評価にはつながらないであろう。

また，繰り返し言われる「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を評価するというのは，ＡＬＴやＪＴＥとのコミュニケーションだけでなく，生徒同士のコミュニケーション活動というものも視野にいれなくてはいけない。

その一つの方向として，「実技試験」の導入ということを提言しているが，その中身に関しては，今後の実践の積み重ねが大切である。今（1994）年度，「オーラルコミュニケーションＢ」の担当者として，以上のことを考慮しながら，実践を深めていきたい。

（4）まとめ

本稿では，「演出」という点から，授業や教材の再検討を試みた。特に言いたいのは，教科書関連の「音声教材」の完成度が低いということである。それらは直接，学習者の耳に触れる「素材」でもある。オーラル・コミュニケーションの基礎・基本は「音声」である。多くの教材メーカーが「音声重視」という割には，音声素材にこだわりがないように思われる。英語教育の「素材」と「演出」にこだわってみたいと思っているのは，筆者だけであろうか。

4　今後の展望

今年からいよいよ本校でも新カリキュラムが実施され，オーラル・コミュニケーションＢの授業が始まった。最終年度はこの新しい科目の実践を核にして，コミュニケーション能力の評価について更に検討していく予定である。

第２年次を終わって残されている課題を以下に列挙する。

（１）中学校と高校の連携をはかるために，オーラル・コミュニケーションの活動例を検討して，それぞれの重点目標を設定する。

（２）オーラル・コミュニケーション活動の評価について検討する。定期考査におけるリスニング・テストだけでなく，スピーキング能力を測る実技テストの導入や授業中の観察方法のあり方も考慮する。観点別評価についても，その妥当性・信頼性を高めるために工夫していく。

（３）LL 授業やティーム・ティーチングにおいて指導法の改善を目指すだけでなく，通常の授業においても，ペアワーク，グループワーク，個別学習などの学習形態を工夫する。

（４）オーラル・コミュニケーション能力の育成を目指した中高一貫カリキュラムを編成する。

将来的には，イギリスのＮＣ（National Curriculum）のように，４技能のそれぞれに関して６年間にわたる詳細な教材配当・シラバス作りを行い，各学年での到達目標を具体的に定めることが目標である。その内容は，必ずしも現行の学習指導要領の枠内である必要はない。学習指導要領に囚われない，ある意味ではその先導的試行として実践を構築することも，国立大学の附属学校に課せられた使命の一つであると考えられる。附属学校の存在意義が問われている今，我々にも発想の転換と，自己の存在を自らの力で証明していく「積極的な態度」が要求されるからである。

また個人的な経験だが，筆者は昨（1993）年度学内の配置換により１年間附属の現場を離れ，学校教育部に研究専従として在籍した。その間，筑波大学外国語センターの非常勤講師として大学１年生の英語Ⅲ（リスニング）を担当した。そこで最初の時間にアンケートをとってみたところ，「リスニングが得意だ」と答えた学生はほとんどいなかった。そこで，後述するテストを実施してみたところ，学生達のトラブル・スポットは共通であった。

根岸（1992）によると，聞き取れない理由は，「文字を見ても理解できない」場合と「文字で見れば理解できる」場合とに分けられる。前者の場合は，語彙・文法の力不足や内容に関するスキーマの欠如が原因だと考えられる。しかし，後者の場合はどうか。最近は，スキーマの活性化を重視した指導が流行である。しかし，静（1993）でも指摘しているように，「音声になると聞き取れない」学生に対する手当を怠ってはならない。

前述したテストに用いたのは，中学２年生の教科書である。当然，文字にすれば，簡単に理解できる内容である。聞き取れない場合の理由は，すべて純粋に「音声そのもの」の聞き取り能力

不足ということになる。典型的な誤りは以下の（　　）内に示した通りである。

1．We *brought him* all the way from Japan. (broughting!!!)

2．Did you *keep him* in the house? (keeping)

3．No, we *kept him* outside. (kepting!!!)

4．*Give him* somethimg to eat. (Giving)　　(*New Horizon English Course 2*)

子音／h／の脱落にまったく慣れていないことが分かる。何人かの学生に聞いてみたところ，中学・高校時代に，弱音化，リエゾン，音の脱落等の音声変化について指導された記憶のある者はほとんどいなかった。意識的に授業で取りあげない限り，このような力は育成できないということであろうか。

本校のカリキュラムを考える上で，このような地道なボトム・アップも視野に入れていかなくてはならないだろう。

参考文献

久保野雅史（1994）「各学期末の実技テスト――面接テストの試み」『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告』第33集

文部省（1992）『高等学校外国語指導資料　英語を聞くこと及び話すことの指導　指導計画の作成と学習指導の工夫』

文部省（1993）『中学校外国語指導資料　コミュニケーションを目指した英語の指導と評価』

根岸雅史（1992）「リスニングのつまずき――診断とその治療」『現代英語教育』1992年９月号　東京：研究社出版

静哲人（1993）「オーラル・コミュニケーションＢ：素朴な疑問」『関東甲信越英語教育学会・ニュースレター』No.50